

# あのとときの常呂・写真館

VOL 136

(1992年)

平成4年11月23日

『風の記録。光の記録。

夢の里、福山ものがたり』出版記念パーティ

▶『風の記録。光の記録。 夢の里、福山ものがたり』は、昭和59年から8年にわたり、福山小学校の児童が作り続けた版画カレンダーの一部とカレンダーづくりに励んだ当時の子どもたちの思い出、地域の人たちや教師の声も数多く集めて載せた記録の本です。●「福山小版画カレンダーを記録する会」が「ふるさと夢基金」を活用して、この本を発刊した思いや経緯を、平成5年1月号の「広報ところ」にまとめているので紹介します。●また、平成7年に完成した「愛林橋」(福山の常呂川支流：ホロナイ川に架かる橋で、栄福橋から300mほど常呂寄り)には、昭和62年に制作した児童の版画が橋の欄干に飾られています。常呂図書館のホームページに写真を載せているので、〈愛林橋〉のキーワード検索でご覧いただけます)



旧福山小学校で行われた本の出版記念パーティ



\*この5枚の写真は、本の完成後、平成4年12月15日にハガキ大の版画を制作・印刷しているようすです。



\*この時制作した版画のうちの3枚。常呂図書館で複数冊所蔵している本の中表紙をめくった裏に1枚ずつ貼り付けられています。本は500部作られたので、それぞれの本に違う作品が葉のように貼り付けられていると思います。「おまけ」のようで、楽しい試みです。この時、何種類の作を制作したのかは不明ですが、元福山小学校児童最後の作品です。



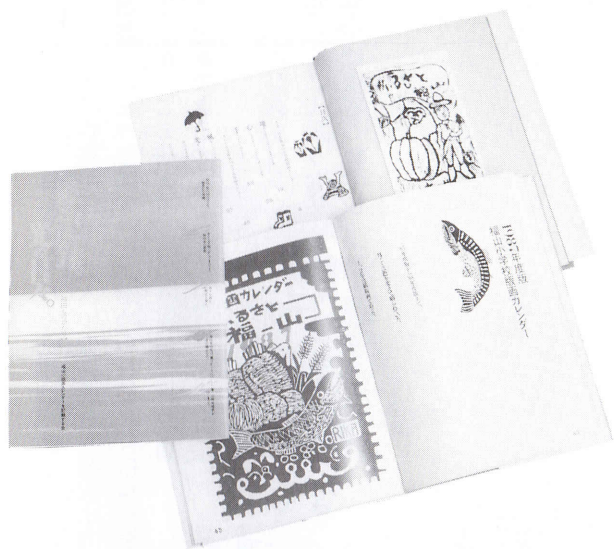
\* 版画が収録されている本の表紙

# 八十二ページにふる里の夢をつむいで 福山小版画カレンダーが本になった

昨年三月に福山小学校が休校となりましたが、休校になるまでの八年に渡って児童が作り続けてきた版画カレンダーが、「福山小版画を記録する会」(代表・小野寺俊幸ほか十九人)の手により「風の記録。光の日々。【夢の里、福山ものがたり】と題した一冊の本となり、発行された十一月二十三日には、発行記念パーティーと本に使用した木版画などの作品展が開催され、大きな反響を呼んでいます。

この事業は、平成四年度「ふるさと夢事業」により実施されたもので、会の編集委員のひとりである浦西孝浩さんに、事業の様子を伺いながら経過を紹介します。

## 風の記録。 光の日々。



【夢の里、福山ものがたり】

### 事業の概要

この事業の期間は、七月から十一月のおよそ五カ月間で、会のメンバーは二十人です。

本は五百冊印刷され、八十二ページに百八枚の版画が使われています。事業費二百六万円で補助額は百六十万円です。

作成された本のうち、およそ四百冊を福山小学校が休校になる以前まで配付していた先や作成関係者、公的機関、そして事業に賛同してくれた方々に配付され、残りの百冊は区に保管をお願いしています。

### 休校・地域の心・木版画が夢の形に

一昨年十二月頃に、自分が作っているミニコミ紙に版画カレンダーを掲載するため福山小へ借りに行ったとき、福山小PTAの方たちが、版画カレンダーを本に残したいという話を校長先生から聞き、何とかこの夢を実現したいと思い、地域の人や周りの人たちと相談し進めることになったんです。

### 大いに夢を語らった 二十一人の仲間

とくに地域では、本だけつくればいいのではなくて、休校後の学校の活用についての不安があったりして、版画をとおして学校のあり方を見直したり、活かしていくための大きな語らいの場にもなったんでないかなと思います。

### 夏休みに 版画の授業が再現



写真を撮ったり版画づくりは、子どもたちの夏休み期間を利用してやりました。

見ていて面白かったのは、前に福山小にいた遠藤先生が、版画づくり



の指導に戻ってきてくれ、子どもたちも最初は照れたりしていたんだけど、すぐ以前のような雰囲気にもど

り、休校前の様子が一時だけ再現されたという感じで、温ったかさがありましたね。

### 手づくりのパーティー 所狭しと百三十人

発行記念パーティーでは、地域の母さんたちが、せっかくならば来てもらうのに地域をよく知ってもらおうと、自分たちの手作りのもので歓迎したい気持ちから、若い夫婦や老人クラブの方々にも広がり、とにかく皆で楽しもうと自然に話し膨らんでいったんです。



### ひと夢すぎて 新たな出発

いろいろな機会にこの本の紹介をしてもらっていますが、多くの人に読んでもらって感想をもらったり、遊びに来てもらうことで、外の空気がたくさん入ってくるのではないかと思います。

今回の事業をきっかけに、人のつながりがまた広がり、今後いろいろな形で広がりを期待しますが、それで振り回される心配もあるけど、学校を基地とした生涯学習の実践の場、というふうにかりした地域の気持ちがあるし、二十一戸でまとまりがあり理解もあるので、皆でじっくり話し疲れないように積み重ねていきたいと思う。

### 全国から

### 問い合わせが相次ぐ

今も全国から三十件ほど問い合わせがあり、小さな学校で本になったことに価値がある、と評価してくれているようなんです。

会では五百冊作成したけど、増刷の必要があれば、会とは別に区の方とも相談し、今後の取り組みを引き継いでもらおうと思っています。

### 福山にいい風が吹いてきた

代表 小野寺俊幸



子どもたちの瞳に映った福山の暮らしが生活史として素朴ではありますが、いきいきと描かれています。

休校にあたり、子どもたちが育んできた「ふるさと福山」への思いをどうにか残したい、と一冊の本が実現しました。この発刊をきっかけに福山を縁とした人々の新たな出会いの場となれば、と出版にあたっての代表のまとめがあり、「子どもたちに、いいものを残してあげたい。台風もあったけど、いま福山にいい風が吹いてきた。」と期待をこめたスピーチもありました。

学校がなくなり、地域の集まりが少なくなったりと聞くと、まるで福山のステイジのようだと思いたんだと思いますね。



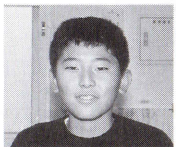
門間謙次さん(七十三歳)昔はこんな立派なことなかったよ。今の子どもたちは立派だ。これが続けば、地域も活性化するし、どうなっていくか楽しみに待っていますよ。



しきでいっばい。子どもたちが大きくなるのが楽しみです。教育は長いスパンで、改めてそう感じます。



小野寺理香さん(常呂高二年)こんなに人が集まったの見たことありません。これからもいい思い出になっていくし、やったことを誇りに思う。



遠藤省三さん(網走市嘉多山小教諭)五年間過ごした地域に、輪が広がって新しいコミュニケーションができて驚きと嬉

発行を心待ちにしていた地域の人や作成に関わった人たちに、会場で一言ずつ感想を聞いてみました。吉江毅浩くん(川沿小五年)何枚も刷るのがたいへんだっただけ、あんな立派な本できると思わなかった。版画が得意になった。